

梓に至り、その基盤はいよいよ確かなものとなった。

十三年間に及んだ父の遺産分割相続に終止符を打ち、生家を二分し妻を得て一家の主人となったのもこの間のことであった。

北信に強力な社中を作りあげ、精神的・経済的に安定し、人並みの家庭を得た一茶は、存分な作家活動を営んでいく。『七番日記』後半から、『八番日記』にかけての旺盛な作句力は、そうした背景にささえられたものだった。

注

(1) 「留別渭浜庵」に、

「かく賤しかりき身をも御取立下され、既に執筆の役を蒙りしが、おもはずも遠国のたらちね病体たゞならねば、三十日余りの御いとまいたゞくことの有難く、若、父本復もあらば、とみに帰参して、亦々御召つかひ之程奉希物ならし。

華のもと是非来て(掃除)除掃勤ばや

惣御連中へ留別

華の友又逢ふ迄ハ幾春や」

(2) 前田利治氏紹介の「二六庵切れ」(寛政四年秋、伊予の山中時風を訪ねた折の筆。『俳句とエッセイ』昭49・2の巻頭に写真)に、

「入野の風君を訪ふ。あはず、霧晴てゐるのに雲のあるじ哉

右東武 二六庵 一茶」

(3) 前田利治「一茶自筆『俳人住所録』ほか」『連歌俳諧研究』第40号

(4) 李台編『雀芝統篇』(享和元年板)所収「新敷」半歌仙

(5) 拙稿「『我春集』の序文をめぐって」(『城西人文研究』第十一号)、『我春集』から『株番』へ(『城西人文研究』第十二号)など。

(6)

魚淵の巻頭文は、現存の一茶の真蹟に合致し、一茶の代筆であることがわかる。それには次のようにある。「寛政の頃かとよ、筑後国高良山の麓に始て桃青雲神のやしろ走りぬ物から、おのれ其御手洗に嗽ぐこと久しく、よりくそなたへ向て音をのみぞなきける。ことしといふ今年、彼むくげの一句を御霊として、爰の日吉の籬のかたはらに、かたのごとくの石をいとなみ、馬除うまひらの柵ゆひ廻し侍る。翁をしたふものはさら也、牛かひわらはに及迄、折ことなかれ、代(戌)ことなかれと、おそれみくぬかづきぬ」。

人(発句・連句)を並べ、樗堂の書簡を跋に代えてある。

このうち、信濃の部に入った人々は合計四十九名(一茶を除く)である。この中には故人の猿左(享和元年没)、柳荘(文化八年没)、宗源(一茶の父弥五兵衛の法名、「辞世」と注記してあるが一茶の代作と見てよからう)、柏原に滞留して幼時一茶が指導を受けたかとも言われる長月庵若翁(「文化十年十二月八日於当所没」とある)や葛三・蕉雨なども含まれている。

地域ごとに、主要な人物を拾ってみると次のようになる。

▽善光寺

五什・一考・反古・文路・春尾・柯尺・武日・猿左・柳荘

▽浅野

文虎・竜卜

▽長沼

允兆・松宇・杉谷・春甫・呂芳・魚淵・松宇・掬斗・素鏡・笹人・程我・二休・雪丸・冬水(文化十一年四月没)

▽湯田中

希杖・其翠

▽毛野

可候

▽古間

白飛・雪居

▽高井野(紫・堀ノ内)

兎園(寛政十二年五月没)・春耕・成布・臯鳥・稲長

▽六川

知洞・大綾

それぞれの人物についてはすでに述べてきたとおりであるが、特に長沼の連衆の名が多い。長沼は一茶が、最も精力的に足をはこんだ地域であり、前述のごとく松宇・春甫・呂芳・魚淵・掬斗・素鏡などいづれも経済的に恵まれた人たちであった。それが、柏原帰住後の一茶の生活をささえたことはいまも言ってもない。一茶はそれを十分に計算していたらしく、この集で特に長沼の連衆を厚遇し、文化十一年四月二十五日興行の「江戸へいざ／＼とやほととぎす」(一茶)を発句とする春甫・呂芳・魚淵・松宇・充兆・掬斗・素鏡・笹人の半歌仙を加えている。

『三韓人』の信濃の部に名を連ねた人々に中野の山岸蘭腸(梅堂)・梅塵父子、野尻の湖光・関之・魯童を加えれば、北信における一茶社中の主要人物がそろう。この時期、まだ中野の山岸家とは親交を結ぶに至っていなかったのだろうが、野尻の湖光・関之などの名が見えないのはなぜであろうか。

八

文化九年正月、『株番』の序で、「よし／＼汝はなんぢをせよ。我はもとの株番」と言い切った一茶は、以降、北信における自身の門派形成に精力的に動いた。『董艸』『木槿集』を経て、『三韓人』上

日、善光寺(文路)。七日、古間。九日、二ノ倉。十日、柏原。十一日、赤川の常田久右衛門の娘きくと結婚。十七日、野尻。二十五日、長沼上町(二十六日、呂芳。二十七日、上町。二十八日、掬斗)。二十九日、浅野。

右は四月までの動向である。こうした動きは、八月二日善光寺の三好屋(上原文路)を立てて江戸に向うまでの間、精力的に続けられている。二月五日、春甫・掬斗とともに湯田中へ赴き、春甫・掬斗は同日中に帰ったが、一茶は十日まで滞在、一茶の「あつさりと春は来にけり浅黄空」を発句とした希杖との両吟歌仙(『株番』所収)の成就があった。同月二十六日、浅野に入って、一茶の「此やうな末世を桜だらけ哉」を発句とする文虎との両吟歌仙(『株番』『ほまち畑』所収)の成就があった。なお、一茶・文虎両吟歌仙『ほまち畑』は、以後文政九年までの十九歌仙を収める。

四月、毛野・浅野・長沼善光寺にあった一茶は、七日に古間に入り、九日は実母の里二之倉の宮沢徳左衛門に一泊している。いずれも結婚のあいさつと、その準備であろう。十一日、赤川(現、信濃町の内)の常田久右衛門の娘きく(二十八歳)と結婚。『七番日記』には「妻来」とだけある。

四月二十五日長沼に赴き四泊、浅野を経て五月一日柏原に帰った。翌二日には、雪居・魯童(野尻住)が祝いに来た。日記には「大酒宴」とある。三日には関之も訪ねてきた。この月に遠出をするのは二十二日以降である。

二十二日毛野、二十五日六川に入った一茶は、六月二日、知洞とともに湯田中に遊ぶ。知洞の「我宿は蚊遣のほそいあたり哉」を発句とする一茶・希杖の三吟歌仙(梅塵抄録本『一茶連句集』所収)はこの折の成就である。

六月八日まで湯田中にあった一茶は、同月九日紫(高山村)に入り、十一日六川、十二日浅野を経て十三日に柏原へ帰っている。二十三日、妻・きくとともに赤川の常田家へ行き、翌二十四日には妻を残して柏原へもどり、二十六日には呂調(善光寺住)の俳席に出て反古の宅に泊り、二十八日は文路の三好屋に泊った。柏原帰着は翌二十九日であった。

七月は、四日浅野、五・六日長沼(呂芳・掬斗)、八日浅野、九日毛野を経て、柏原帰着は十一日。下旬になって、二十二日から長沼(二十二日、魚淵。二十二日素鏡)に滞在、八月二日善光寺の三好屋に一泊して江戸へ向っている。江戸俳壇引退のあいさつと、その記念集『三韓人』(文化十一年「甲戌冬至日」成美序)上梓のためである。

『三韓人』は、成美の序について、蓼太・竹阿・白雄・素丸・寸来・浙江・素嶠・松井・春雨を没年順に並べ、発句に没年月日を注記して巻頭に掲げ、「雪ちるやきのふは見えぬ借家札」(一茶)を発句とする成美・一瓢・諫圃の四吟半歌仙、続いて成美・巢兆・完来・白芹・一峨・久臧・諫圃・素玩・一瓢・立砂・双樹・鶴老・月船・恒丸・兄直・大笈・祇兵・花嬌など長年風交を重ねた人々の発句を収め、さらに上総・安房・信濃・甲斐・越後・加賀・常陸・陸奥・出羽・三河・伊勢・相模・尾張・京都・摂州に分けて各地の俳

住)などがつきつきにかけつけた。一茶は一門の連衆の厚遇に、満足の日々を送ったようである。「ござるぞよ戸隠山の御夕立」「何もないが心安さよ涼しさよ」「我家とふん反りかへる扇哉」などは、いずれも病臥中の作品であるが、悲痛なものを感じさせない。そればかりか、「よし／＼汝はなんぢをせよ。我はもとの株番」と言い切った一茶の存分な作句活動がはじまったのである。具体的には、「雀子を遊ばせておく晝哉」「おとなしく留守をしている葦」「長／＼の留守にもあかぬ庵の蚤」や、後に自身が好句として『おらが春』に収めた「いうぜんとして山を見る蛙哉」「柳からも／＼んぐわとて出る子哉」「あの月をとって／＼と泣子哉」「秋風に歩行て逃る螢哉」「餅花の木陰で／＼うちあは／＼哉」(句形・表記は七番日記による)などいずれもこの年の作品である。

この年、佐藤魚淵撰(一茶代撰)の『木槿集』(文化九中とし仲秋序)の上梓もあった。『木槿集』は、文化九年十月、魚淵が長沼の日吉神社に芭蕉の「道のべの木槿は馬にくはれけり」(『野ざらし紀行』の句碑を建て、桃青霊神を奉祀したときの記念集として編まれたものである。魚淵の巻頭文(注1)に続けて、「不肖さも気の附今(注2)や花木槿」(魚淵)を発句とする魚淵・素鏡・虎杖・掬斗・春甫・松宇の表六句を冒頭に置き、成美・道彦・巢兆ら著名俳人の句を載せて權威を持たせ、一茶の「秋おしめ／＼とか昔松」を発句とする笹人・魚淵・程我・雪丸・二休など長沼連による歌仙の前後に一茶社中の発句を配してある。これを地域別にみると上にあげた長沼連を中心に、毛野・古間・野尻・江部などを除いて各地の代表的な連衆の名が見え

る。善光寺の反古・一考・五什、浅野の竜卜・栗之・湯田中の希杖・六川の知洞、高井の春耕・成布・臯鳥・稲長、倉井の一溪などである。

文化十一年、年が明けても一茶は精力的な巡廻を続けている。念のため、『七番日記』に当たっておく。

▽一月

九日、毛野。十二日、浅野。十三日、長沼(十三日、呂芳。十四日、魚淵。十六日、上町。十八日、掬斗。十九日、笹人。二十日、呂芳。二十一日、素鏡。二十二日、允兆)。二十四日、善光寺(文路)。二十五日、反古(俳席)。二十九日、長沼上町。

▽二月

二日、春甫・掬斗と湯田中へ向う(江部泊)。五日、湯田中。十一日、六川(知洞)。十五日、長沼(呂芳)。十六日、浅野。十七日、毛野。十八日、古間。二十一日、銀藏・徳左衛門立合いにより生家を二分。二十二日、古間。二十七日、古間。

▽三月

二日、古間。三日、古間。十日、毛野。十一日、六川(代五郎)。十四日、浅野。十五日、長沼上町。二十二日、古間。二十三日、柏原。二十四日、野尻(関之)。二十五日、古間。二十六日、二ノ倉。二十七日、毛野。

▽四月

一日、毛野。二日、浅野。四日、長沼内町。五日、長沼上町。六

(呂芳)。十三日、善光寺(松屋)。十四日、小林反古宅。十六日、松屋。十八日、桂好亭(文路)。「七番日記」に「去十五日癩兆シ、今日甚」とあり、二十二日の記事には、「山中赤田薬吞、夜大熱」とある。二十五日、可候(見舞客)、三十八日、文路・春尾・反古と四吟歌仙成就(病床)。

▽七月

二日、異母弟・仙六(見舞)。八日、可候(見舞)。二十三日、掬斗・素鏡(見舞)。二十六日、雪古(見舞)。二十八日、元寿、有隣(見舞)以下略。

▽八月略(この月の条末に「^{(七)(五)}九十九日臥 桂好〔亭〕とある)。

▽九月

五日、長沼。六日、経善寺(呂芳)。七日、掬斗宅。八日、素鏡宅。九日、笹人宅。十日、浅野。十一日、毛野。十二日、柏原。二十日、古間。二十三日、毛野。二十四日、六川。

▽十月

二日、長沼上町。四日、素鏡(俳席)。五日、掬斗(俳席)。十一日、善光寺(松屋)。十二日、長沼(経善寺芭蕉会)。十五日、江部。十八日、六川。十九日、浅野。二十日、長沼(素鏡)。二十四日、善光寺(松屋)。二十五日、三好屋(文路)。二十七日、長沼(呂芳)。二十八日、六川。二十九日、湯田中(十一月十一日まで滞在)。

▽十一月

十二日、江部。十五日、六川。十八日、長沼上町(二十日掬斗、二十一日素鏡)。二十三日、浅野。二十五日、毛野。二十七日、古間。

二十九日、柏原(観国・本陣)。三十日、毛野。

▽閏十一月

一日、浅野(橋本)。二日、長沼。三日、長沼上町。四日、善光寺(二考)。五日、長沼(五日呂芳、七日掬斗、九日素鏡)。十二日、長沼上町。十三日、善光寺。十五日、長沼上町(十六日程我、十七日魚淵、二十二日呂芳)。二十三日、六川。二十七日、長沼(呂芳)。二十九日、長沼上町。

▽十二月

三日、長沼(呂芳)。四日、浅野(六日橋本)。七日、毛野(八日、「可候從飯山」。十二日、柏原。十四日、野尻。十五日、久保。十九日、古間。二十六日、古間。

『七番日記』文化十年十二月の条末に、「三百八十三日 在庵七十五日 桂好(病臥)七十五日」と記すとおりである。訪問先は、病後の静養をした湯田中を除いて、それ以前とほとんど変わらぬ。これは、北信における一茶社中の成立を物語ると見てよからう。

六月二十二日、上原文路の桂好亭で大熱を発し、七十五日間の病臥をよぎなくするが、二十五日には可候がかけつけ、翌二十六日、二十八日には一考(善光寺住)の見舞いがあった。七月に入って、一日に「柏原万蔵」が饅頭一袋を、二日には異母弟の仙六が蕎麦一袋を持って見舞にかけつけた。以後、呂調(善光寺住)、可候・一考・民蔵(毛野)、相我(長沼住)・掬斗・素鏡・雪居・知洞・充兆(長沼

- ▽三月一日
柏原ニ入ル
- ▽三月四日
朝二倉ニ入
- ▽三月五日
アサ古間ニ入ル
- ▽三月十三日
野尻行 直ニ帰
- ▽三月十四日
朝二倉ニ入 直ニ帰
- ▽三月十七日
(毛野)
ケノニ入
- ▽三月二十日
長沼ニ入 (掬斗)
キクト
- ▽三月二十六日
村山ニ入
- ▽三月二十七日
(浅野)
アサノニ入
- ▽三月二十九日
柏原ニ入 古間泊

二月七日、浅野に入った一茶は、正見寺・西原文虎を訪ねたのであろう。浅野で二泊して長沼に入り、ここでは村松春甫・佐藤魚淵・

経善寺(呂芳、十二日)、西島士英(十三日)、住田素鏡(十六日)、中村掬斗・松井松宇などを訪ねたものと思われる。十八日、津野では正覚寺(二休)、十九日、江部では建竜寺(冬水)、二十二日、六川では寺島夏蕉・玉木其璧・梅松寺(知洞)などを訪ねたと思われる。また、二十九日の「ケノニ入」は、滝沢可候宅であろう。

三月に入って、「古間ニ入」とあるのは小林雪居(五日)。十三日、「野尻行」には「湖光ニ『秋暮集』渡ス」「関之ニ『萍窓集』借ス」と併記されているから、石田湖光・叶屋関之に会ったことがわかる。二十日から滞在した長沼で、「草不庵」(二十一日)とあるのは、佐藤魚淵である。

四月以降の動向をみると次のとおりである。

- ▽四月
三日、古間。五日野尻(直ニ帰ル)。十二日、毛野。十三日、渋温泉。十八日、六川。十九日、長沼上町。二十日、長沼内町。二十一日、浅野。二十二日、柏原。二十三日野尻(関之)。二十四日、柏原。二十五日野尻(関之・湖光と山行)。二十六日柏原。
- ▽五月
三日、古間。四日、二ノ倉。六日、毛野。八日、六川。十二日、長沼。十四日、掬斗宅。十五日、善光寺(松屋)。十六日、三好屋(文路)。十七日、柏原。十八日、野尻。古間泊。二十一日、毛野。二十二日、六川。
- ▽六月
三日、江部。四日、六川。六日、浅野。八日、津野。九日、長沼

▽一月十四日

(浅野)
アサノニ入

▽一月十六日

(江部)
エベニ入

▽一月十九日

柏原〔三〕入 父十三〔回〕忌

▽一月二十三日

二倉〔三〕入

▽一月二十六日

遺言ノ家及倉其外糶滞金卅兩為引取 仙六因不得心明廿七日出立

東都御糺所ニ為上訴 然所妙專寺御坊因乞和延引

野尻ニ入

十一月二十四日柏原に入った一茶は生家に三泊、二十七日からは古間・毛野・長沼を巡回して、十二月十五日いったん生家にもどり、二十一日から野尻へ行き、二十四日には借家に入って長期交渉にかまえた。年明けの四日から長沼へ行き十三日まで滞在、住田素鏡・西島士英宅にも泊った。浅野・江部を巡って十九日父の十三回忌法会に列席のため柏原へもどった。二十三日、四日と二之倉へ行き、対策を練って、二十六日には「東都御糺所」に上訴すると言出し、明専寺の調停で「熟談書付之事」を手に入れ、ようやく和解となった。

「熟談書付之事」を掌中にした一茶は、二月に入ってからこれまでに

風交を結んだ北信の人々を限なく訪ね巡った。柏原帰住のあいさつが表向きの理由、実は自身の門派をより確かなものにするためであった。『七番日記』二月、三月の記事を抜き出してみると、次のごとくである。

▽二月七日

(浅野)
アサノ〔三〕入

▽二月九日

長沼〔三〕入

▽二月十八日

(津野)
ツノニ入

▽二月十九日

(江部)
エベニ入

▽二月二十二日

六川ニ入

▽二月二十三日

西島〔二〕入

▽二月二十四日

呂〔芳〕ニ入

▽二月二十五日

善光寺ニ入

▽二月二十九日

(毛野)
ケノニ入

「西島」は長沼の西島土英（次郎次）、「小升」は柏原の旅宿・小升屋である。

六月十七日、善光寺の三好屋（上原文路）に入り、翌十八日に柏原へ入ったが、生家には泊らず本陣の世話になった。本陣の都合の悪いときは旅宿・小升屋を利用し、生家での宿泊は七月の三日間だけであった。もちろん、本陣や小升屋に滞留中は、「取極一札之事」の実行をせまっただろうし、実母の里・二之倉ではその対策を相談したであろう。だが、日記にそれについての記事もないし、交渉後の感情のたがぶりをうかがわせるような句もない。それよりも「老たりな瓢と我が影法師」「又も来よ膝をかさうぞきりくす」「きりくしやんとしてさく桔梗哉」というような、むしろ安らいだ気分を感じさせる句が多い。「取極一札之事」の実行よりも、自身の社中拡張のために過ごした時間が多かったためであろう。また、周囲の好意に心慰められる日々を重ねたためであろう。

七

文化九年十一月十七日、一茶は柏原帰住を決めて江戸を立った。同月二十四日、雪の柏原に到着。途中、寄り道はしていない。『七番日記』に当たってみる。

▽十一月二十四日

柏原ニ入

是がまあつひの栖か雪五尺

▽十一月二十七日

古間ニ入

▽十一月二十八日

毛野ニ入

▽十一月二十九日

大倉ニ入

▽十二月一日

（浅野）
アサノニ入

▽十二月三日

長沼ニ入

▽十二月十二日

（毛野）
ケノ「ニ」入

▽十二月十四日

古間ニ入

▽十二月十五日

柏原「ニ」入

▽十二月二十一日

野尻「ニ」入

▽十二月二十四日

借家「ニ」入

▽一月四日（文化十年）

長沼ニ入

二倉ニ入 仏事有

▽七月六日

古間〔三〕入

▽七月八日

本陣
本陳ニ入

▽七月十日

問屋ニ入

▽七月十一日

毛野〔三〕入

▽七月十二日

長沼経善寺ニ入

▽七月十三日

西島ニ入

▽七月十四日

経善寺ニ入

▽七月十五日

素鏡ニ入

▽七月十七日

柏原ニ入

▽七月十九日

本陣
本陳ニ入

▽七月二十三日

小升ニ入

▽七月二十六日

毛野ニ入

▽七月二十九日

柏原ニ入

▽八月七日

浅野
アサノニ入

▽八月八日

長沼素〔鏡〕ニ入

▽八月九日

〔掬〕斗ニ入

▽八月十二日

善光寺ニ入

『七番日記』毎月の条末には滞在地ごとに日数の集計がある。それ
れも引いておく。

▽六月

中村五。古〔間〕三。二倉一。野〔尻〕二。小升〔屋〕一

▽七月

本〔陣〕八。古〔間〕四。長沼〔五〕。毛〔野〕四。小〔升屋〕

五。二〔倉〕一

▽八月

小〔升屋〕五。本〔陣〕一。ア〔サノ〕一。長〔沼〕四。

「中村」は本陣・中村観国であろう。「石田」は野尻の石田湖光、

ったものと思われる。もちろん、『葦艸』板行の意義も十分に計算していたものと思われる。

その『葦艸』の上梓は成った、だが、かんじんの「取極一札之事」の実行は、そのめどさえたたない。そうした状況下で、一茶は最後の賭を試みた。『我春集』の序は、その具体的行動を示すものだったと見てよからう。^(註5) また、この年は一度も帰郷せず、もっぱら両総を巡回しているのである。

六

文化九年、『株番』の序で、「よし／＼汝はなんぢをせよ。我はもとの株番」と記し、『七番日記』五月の条に、「いざいなん江戸は涼みもむつかしき」と記す一茶は、三月末から富津へ出かけ、四月四日の花婿三回忌に列し、『花婿家集』を編み終えた。江戸に帰ったのは五月五日のことだった。一茶の内部には明確な一区切りができたものと思われる。

文化九年六月十二日江戸を立った一茶は、同月十八日に柏原へ着いた。『七番日記』によって、このたびの一茶の動向を探ってみる。

▽六月十七日

善光寺三好ニ入

▽六月十八日

柏原 中村ニ入

▽六月二十日

古間ニ入

▽六月二十二日

二ノ倉ニ入

▽六月二十三日

小升ニ入

▽六月二十四日

中村ニ入

▽六月二十六日

古間ニ入

▽六月二十七日

野尻ニ入 関之泊

▽六月二十八日

石田ニ入

▽六月二十九日

中村ニ入

▽七月一日

古間ニ入

▽七月二日

中村ニ入

▽七月四日

問屋ニ入

▽七月五日

一夜をすごして帰途についた。

長沼では経善寺(呂芳)、中村順石(掬斗)、浅野では正見寺、毛野では滝沢富右衛門(可候)、江部では建竜寺(冬水)と、特に昵懇の間を訪れただけで、疲れはてて江戸へもどったようである。そんな中で、二十二日の「掬斗亭興行」(歌仙未滿)は、なによりもありがたく思われたことであろう。一座した連衆は、発句「せい出してそよげよわか竹今のうち」の一茶のほか呂芳・春甫・素鏡・掬斗の四名であった。

五

文化七年五月、「取極一札之事」(文化五年十一月成立)の履行をせまるべく帰郷、だが、とりつく島もなく「古郷は」の一句を吐いて生家を出た。この時、再度の交渉はもたず、長沼方面に滞留して、六月一日には江戸へもどっている。

江戸へもどった一茶は、六月十三日江戸を立て流山(秋元双樹)に入り、十四日には守谷(西林寺・鶴老)、十六日には布川を巡って、二十日には流山にもどる。江戸へ帰ったのは同月二十三日であった。

七月は、十一日夜舟に乗り木更津へ向った。木更津から富津に出て、八月一日夜舟に乗り翌二日に江戸へもどった。

十月九日馬橋に入り、十日布川、十三日田川、十五日佐原(恒丸)、十六日飯田(兄直)、十七日兄直とともに香取神社に参り、十

九日小南、二十七日田川を経て、二十八日には布川へもどった。流山を経て江戸へ帰ったのは十一月一日であった。

十二月二十一日流山に入り、同所で二泊して二十三日守谷着。「行としや空の青きに守谷迄」(一茶)を発句とした鶴老・天外との三吟歌仙を成就、『我春集』の序を書き、「信濃国乞食首領一茶書」と署名した。

なお、この間の十二月十九日には、長沼の佐藤魚淵から書簡と扇代がとどけられた。『七番日記』には、「(十)九晴 長沼魚淵文通 六十八文扇代来ル」「廿晴 長沼返書出ス」(信毎版全集の年譜は「九日」と誤る)とある。魚淵の正式入門を物語るものと見てよからう。魚淵は、長沼の医家・佐藤信胤。正風院・二水観などと号し、後に一茶の強力な後援者となる。『おらが春』第五話は、魚淵のために書かれた章段とも言える。また、この年内には春甫撰(一茶代撰)の俳諧集『葦艸』(文化六年八月、成美序)の板行もあった。

『葦艸』には、芭蕉の「山路来て何やらゆかし葦草」を立句とした脇起し歌仙に一座した春甫・掬斗・呂芳・松宇・素鏡・杉谷・雪丸・稲伽・完芳などの長沼の連衆のほか、善光寺の文路・反古・紫の春耕・皐鳥、湯田中の其翠・希杖・不及、毛野の可候、倉井の一溪、浅野の梅太(文虎)など、後の有力社中の名がそろっている。これらは続刊の『木槿集』や『あたまつり』の主要な顔ぶれでもある。

推測の域を出ないが、一茶はこの年、一気に「取極一札之事」の履行をせまろうとした背景には、『葦艸』の連衆に対する期待があ

甫・掬斗・呂芳・松宇・素鏡・杉谷・雪丸・稲伽・完芳らの脇起し歌仙はこの折の成就であろう。杉谷・雪丸・稲伽は前年帰郷の折の日記にも見えるが、新たに佳田素鏡の名が見える。素鏡は、長沼六地蔵の地主・住田奥右衛門。一茶代撰の『たねおろし』(文政八板)がある。

『堇艸』に収められた、一茶の「雪除に押まげらるゝさくらかな」を発句とする一茶・呂芳・春甫・完芳による半歌仙もまた、このたびの帰郷時における興行であろう。呂芳は長沼経善寺の住職、完芳はその父である。

なお、巻末に「右文化六年九月廿五日」と添書された長嘯の「薺のわりなき種を持ちけり」を発句とする長嘯・一茶・関之の三吟半歌仙(長嘯編『野尻之秋風』所収)もある。

文化七年五月十日、七回めの帰郷のため江戸を立っている。『七番日記』によって、その動向を探ってみる。

▽五月十日 江戸出立(鴻之巣泊)

五月雨や胸につかへるちよぶ山

▽五月十五日

長沼呂芳にやどる

▽五月十六日

浅野 正見寺泊

▽五月十七日

毛野村滝沢泊

▽五月十八日

野尻魯堂亭に泊

▽五月十九日

辰刻柏原ニ入 小丸山墓参

村長誰かれに逢ひ我家に入る。きのふ心の占のごとく素湯一つとも云ざれば、そこ／＼にして出る。

古郷やよるも障るも茨の花

小升屋太介泊

▽五月二十日

申刻柏原を出て倉井一溪に泊

▽五月二十一日

長沼呂芳ニ入

▽五月二十二日

夜掬斗会

▽五月二十三日

江部建籠寺(龜)に入

▽五月二十五日

長沼(掬斗)きくくに入

五月十九日柏原に着いた一茶は、まず明専寺裏にある代々の墓参をすませて、生家に入った。だが、このたびは交渉をするような雰囲気ではなかった。「そこ／＼」に家を出て旅宿・小升屋に一泊、倉井・長沼・江部をまわり、長沼に帰って中村掬斗(順石)で最後の

- ▽四月十五日
(毛野)
 ケノニ入
- ▽四月十六日
- 長沼ニ入 呂芳湯治 春甫として善光寺(桂)圭好ニ入
- △四月二十一日
 春甫同行二人雁田参 浅野竜卜に泊
- ▽四月二十二日
(毛野)
(ニ入)
ケノ
- ▽四月二十三日
 江部建竜寺泊
- ▽四月二十五日
 紫ニ入
- ▽四月三十日
 日滝月亭臯鳥同道
- ▽五月三日
(江部)
 エベニ入 六川ニ入
- ▽五月四日
(江部)
 エベニ入
- ▽五月五日
(毛野)
 ケノニ入
- ▽五月七日
 二ノ倉ニ入
- ▽五月八日

- 柏原ニ入 かつら屋泊(桂)
- ▽五月十一日
 長沼ニ入
- ▽五月十五日
(毛野)
 ケノニ入
- ▽五月十七日
 柏原園右衛門泊
- ▽五月十八日
 借屋ニ入
- ▽五月二十一日
 浅野正見寺泊 古間雪居の母の(喪)もにこもるをとふ
- ▽五月二十二日
(江部)
 エベニ入
- ▽五月二十四日
 紫ニ入
- ▽五月二十八日
(浅野)
 アサノニ入
- ▽五月二十九日
 長沼ニ入

『文化六年旬日記』は、同年五月以降を欠き、その後の動向ははつきりしないが、翌文化七年板の春甫撰(一茶代撰)の、『堇艸』に収めてある芭蕉の「山路来て何やらゆかし堇草」を立句とする春

稲伽ニ入 金箱村花 火有 金井金右衛門此里ニアリ

▽七月二十七日 高井

松宇同道高井野神事狂言見物

▽七月三十日 六川・長沼

六川知洞上人中食 長沼ニ入

▽八月八日 江部

▽八月十二日 長沼

▽八月二十一日 野尻

湖光、完枝と青竜山ニ入 真光寺のうらニ入

▽十二月四日 毛野

▽十二月五日 浅野

▽十二月七日 長沼

▽十二月八日 善光寺

善光寺^(進)圭好ニ入

『文化五・六年旬日記』『文化五年八月旬日記』(いずれも断簡)の

記事によれば、この度の一茶の動行は右のとおりであり、江戸へもどったのは十二月十六日であった。

この帰郷は、祖母・かなの三十三回忌取越し法会列席が表面の理由であろうが、十一月二十四日「取極一札之事」を取りつけて、村役人に提出しているから、父の遺産分配について強い交渉を重ねていたものと思われる。この間に、八月二十九日、夏目成美から出府を促す書簡があり、十二月に入って江戸の松井から羽織がとどいた

りしている。

また、帰郷中の第一の収穫は、「取極一札之事」を取りつけたことであるが、柏原帰住後の一茶を強力にささえることになる長沼在住の人々、村松春甫・中村掬斗や、六川の梅松寺(知洞)、善光寺の上原文路(桂好亭)などの親交も大きな収穫であった。翌文化六年二月には建部巢兆の画賛を長沼の松井松宇に送り、春甫にも二月、三月に書簡を出し、三月二十日付の書簡では帰郷の予定を告げている。

文化六年四月五日、六度めの帰郷のため江戸を立っている。『文化六年旬日記』によれば、同月九日善光寺の松屋に泊り、十日には二ノ倉へ入ったが生家には泊らず毛野・長沼・浅野・江部・六川などを転々とし、八日によりやく柏原へ入った。だが、生家には泊らず日記には「かつら屋」泊と記している。日記でその動向を追ってみる。

▽四月十日

二ノ倉ニ入

▽四月十一日

同所

▽四月十二日

舟竹ニ入

▽四月十四日

二ノ倉ニ入

野尻は石田湖光、毛野は滝沢可候宅であろう。なお、八月八日の「野尻巴水亭ニ入」の「巴水亭」は湖光宅を指す。また、寺島夏蕉、玉木其璧らとの交渉がはじまったことが確認される。

文化四年十月、この年二度めの帰郷の折りの動向を『文化句帳』により探ってみると、次のようである。

▽十月二十七日

国に行かんとして心すくまず、本郷の先より王子かぎ屋に休む。

▽十月二十八日

草庵を立て、大宮小林三右衛門泊。

▽十一月四日

善光寺ふぢ屋平五郎泊

▽十月五日 柏原

雪の日や古郷人もぶあしらひ

▽十月九日 毛野

▽十月十三日 善光寺

善光寺滝沢ニ泊

▽十月十四日 上田(泊)

南原にて可候に別る

(8)

十月五日帰郷、ただちに生家に入ったが、異母弟・仙六側の応待ぶりは、「雪の日や」の句で象徴されるようなものだったと思われる。交渉の後は、滝沢可候、可候の分家・柯夕の家に泊り、身心の

疲れを癒し、同月十九日には江戸へもどっている。また、可候は善光寺まで同道しており、両者の関係が親密なものになっていたことがうかがえる。

文化五年七月帰郷中の動向も、『文化五・六年旬日記』その他によって、探ってみる。

▽六月二十五日 江戸出立

▽七月二日 柏原着(閏六月中、草津に滞在)

▽七月五日 二ノ倉(法事)

▽七月六日

長沼川辺逍遙 春甫・杉谷・掬斗・雪丸他

▽七月八日 江部

冬水法印他行

▽七月九日

老婆卅三年忌迨夜有(「祖母三十三回忌」の文)

▽七月十日 六川

▽七月十三日 長沼

▽七月十四日 毛野

▽七月十五日 柏原(墓参)

柏原ニ入 古間泊

▽七月十六日 二之倉

▽七月十七日 野尻

▽七月二十六日 長沼

その追善興行であろう。前述のごとく、成布は兎園の娘、春耕はその婿、皐鳥は家の番頭であり、稲長は隣村堀之内の梨本五右衛門貞久(酒造業)である。

柏原の中村与右衛門(平湖)は、高山村紫の久保田家とは親戚であり、春耕・成布・皐鳥と一茶の関係は平湖の仲立ちによるものであろう。また、野尻の関之についても、早くから交渉の跡がみえる。湖光の縁によると考えられるが、平湖と湖光も親戚であるから、平湖の存在を軽視することはむずかしい。

推量の域を出ないが、『寛政三年紀行』の帰郷で故郷に錦を飾った一茶は、本陣(新甫)、菩提寺(明専寺)などにあいさつをするとともに、名主の嘉左衛門やこの与右衛門(平湖)など有力者たちと縁を固めた。そして、与右衛門の親戚筋、石田湖光・滝沢可候・久保田春耕などとの縁を得ることになったと思われる。さらに、湖光から関之など野尻の連衆、可候から柯夕など善光寺の人々、春耕から稲長など高井地方の人々を紹介され、その縁を結んで行ったものと考えてよからう。

『享和二年旬日記』七月二十一日の条に、「野尻湖光、柏原観国来たれば、かの^(叶)ふや吉兵衛へ訪ふ」とあり、「有明に躍りし時の榎木哉」は、その折の作であろう。観国は、柏原本陣の中村六左衛門利資(新甫の息)である。

『文化句帳』元年三月の条には、「十三日晴 南吹 穀雨三月中未一刻ニ入。中村二竹古郷に赴けば、本郷追分迄おくる。霞み行や二親持し小すげ笠」とある。二竹は、中村太三郎、与右衛門(平湖)

の息であることはすでに述べたとおりである。さて、『連句稿裏書』(旬日記断簡)によって、文化四年七月帰郷中の一茶の動向を探ってみると、次のごとくである。

▽七月二十日 野尻

同日の記事に、「外へ出れば、はゞきとを分るがごとくしる人の俤もうしなひ、内に入れば、茨の中にやどるやうにとがくしく、さらに古郷のさまはなかりけり」。

▽八月四日 毛野

▽八月八日 柏原

背筋から冷つきにけり越後山

▽八月十日 六川・小布施

六川 大庄屋 寺島善藏 ^(夏)カ蕉

同 御陣屋 玉木恆右衛門 其壁

同所 梅松寺 法印

小布七町 帯瀬和田七 杜楓

▽八月十一日 毛野・浅野

浅野 松見寺

▽八月十三日 毛野

▽八月十四日 柏原

たまに來た古郷の月は曇りけり

▽八月十九日 野尻

野尻巴水亭ニ入

一 書通 同(ママ)春甫 廿七日とどく
五月十日出

犬の子のついて歩くや印地打

一 紙包一ツ四月廿日 古間雪居へ出 三河丁一丁目川七屋市兵衛へ

出 飛脚彦兵衛

▽文化六年

一 書正月七日(ママ) 通 長沼春甫 こんヤ三丁目菱屋惣八へ出

一 書正月七日 一通 春甫行 画四葉入 神田雉町家主大坂屋惣右衛門に

出

一 紙包書通入 古間雪居行 金巻分入 ちん二百文払 神田三

河丁巷丁目川瀬屋市兵衛方飛脚荒井坂彦兵衛に出

一 書正月十日出 一通 正見寺 十八日とどく

一 書一通 画二葉入 春甫 十八日とどく

一 書一通 春蟻 十八日とどく

里の子がわか菜つむとて化粧哉 春甫

鶯の口もとにさす旭哉 春蟻

うたゝ寝の軒はにくし梅〔の〕花 呂芳

○

いつも鳴あれか鳥かけさの春 梅太

一 紙包画入 長沼允兆逝(行) 荒井坂に遣ス

一 掛物入 正見寺 同人

一 書七月十四日 一通 皐鳥

はつ秋や間引大根に一人酒

どの様に咲て淋しい萩の花

白木槿遠く詠て通りけり

このうち、後に主要な一茶社中となるのは、滝沢可候(善右衛門)、村松春甫(処信)、小林雪居(庄吉郎)、石田巴水(湖光、津右衛門)、呂芳(長沼六地蔵、真言宗経善寺住職)、西原梅太(文虎)、中村皐鳥(弥曾八)であり、二竹の父・中村与左衛門(平潮)を加えても八名にすぎない。

四

『寛政三年紀行』の旅において、柏原帰郷後の一茶の動行ははっきりしない。だが、『知友録』の記載から、柏原の中村六左衛門(新甫)、中村与右衛門(平潮)のほか、善光寺の小松屋吉九郎(猿左)、野尻の石田津右衛門(湖光)、毛野の滝沢善右衛門(可候)、滝沢八郎次(柯夕)などとの交渉があったものと考えてよからう。

父の最期に出会った享和元年の帰郷の時期は、三月十七日東下の士朗らを迎えての半歌仙(注4)があるから三月下旬のことと推定される。

帰郷中には歌仙二巻の興行があった。久保田兎園の「我のみかかゝる桜の朝朗」を立句とする脇起し歌仙と、一茶の「鹿の親笹吹く風にもどりけり」を発句とする野尻の関之(完枝・叶屋重郎平)との両吟歌仙(未完)である。

前者に一座したのは、春耕(脇)、一茶(第三)、成布、皐鳥、稲長である。兎園は前年(寛政二二)五月一日没。したがって、これは

同 石田休次 順和

信州川中島塩崎村 清水折右衛門

同 小県郡室加村 西沢勇藏

他に判読しがたい「□州□奈(在カ) 土田長益 梅児」を加えれば二十六名である。

このうち、後に有力な一茶社中となるのは、善光寺の戸谷猿左(善光寺大門町の旅館主。魚淵の『あとまつり』一茶代撰に、猿左の発句に一茶が脇を付けた歌仙が収めてある)、柏原の中村平湖(酒屋・桂屋。中村二竹の父。可候・春耕・湖光はその親戚)、野尻の石田湖光(野尻宿の脇本陣)、毛野の滝沢可候(大地主)と、その分家の滝沢柯夕(善光寺で菓子商を営む)の五名である。他に、柏原の本陣・中村新甫、一族の菩提寺・明専寺、それに野尻の真光寺の名が見えるのみである。

寛政十一年から文化六年に至る一茶の発・来信控え『急通紀』には、次の人々の名が見える。

▽寛政十一年

- 一 状一通 中村与右衛門殿へ 賃三十式文 日本橋ひもの町高田飛脚に出ス 十月三日(カ)十一日出也
- 一 書二通九月十日 信州耑人屋出 内通雲帯は二十八文払
- 一 状一通 赤塩善右衛門 メ三品也

一 書一通九月十八日出 信州白亀 十月十七日とどく

▽寛政十二年

一 書状一通二月十六日出 信州柏原 平湖入 賃二十八文 耑人長右衛門

▽享和元年

一 書一通十二月十六日 信州野尻巴水ニ出 耑人長右衛門 廿八文添

▽享和二年

一 書一通正月八日出 信州野尻巴水

楯負し男の髭の雫哉

石垣の崩やうごく露の臺

一 書状一通 信州柏原 正月十六日出 賃四十文外平湖入 岡

部入

▽文化四年

一 書一通十月十七日出 柏原中村嘉左衛門

▽文化五年

一 書一通正月十一日 信州アサ野正見寺逝(行) 竜卜に遣ス

一 書一通正月十六日 〃 柏原中村嘉左衛門どの逝(行)

一 書一通二月十日出 信州長沼漱左 三月四日とどく

藪を出て忘れ面也雨の雉子

一 書一通三月十日 浅野竜卜 四月六日とどく

鶯の鳴て老けり小松原 同

東雲や枕の下のはつ蛙 同

忘れぬ花の玉川角田川

麦秋や寺は火燧(毎)に小盃

同じ年の十一月、この年二度めの帰郷では、柏原帰住の決意をかため、同月二十四日帰郷と同時に丘右衛門の借家を借り、遺産分配の交渉をすすめるとともに、後に門派をささえる人々を精力的に歴訪した。そして、翌文化十年一月十九日、亡父十三回忌取越法会に臨み、同月二十六日に至って、とうとう「熟談書付之事」を掌中にすることになった。

三

北信における一茶社中の主要人物には、浅野の西原文虎(飯山藩御用油商。一茶・文虎両吟『ほまち畑』『一茶翁終焉記』『文虎本・おらが存』などがある。栗之はその父)、佐藤魚淵(長沼内町の医家。『木権集』『あとまつり』)とともに一茶代撰、などがある)、村松春甫(長沼六地蔵の画人)狩野派。『董艸』一茶代撰、がある)、松井松宇(長沼上町の名主。『杖の竹』一茶代撰、がある)、住田素鏡(長沼六地蔵の名主。『たねおろし』一茶代撰、がある)、湯本希杖(湯田中の温泉旅館主。『希杖本・一茶句集』がある。其翠一其秋とも、はその息)、久保田春耕(高井郡紫の大地主。酒造業。兎園は養父、成布は妻、皐鳥は家の番頭、毛野の滝沢可候は従兄弟)、山岸梅塵(中野の医家。家は醬油醸造業。『八番日記』『一茶連句集』の書写がある。梅堂一蘭腸はその父)などがある。いずれも富裕な人たちであり、経済的な援助をおしまなかった。
(注3)
寛政二年から同四年の間の筆と推定される『知友録』に収めてある約二百五十名のうち、信州の人数は次の二十五名である。

- | | |
|-----------|---------------|
| 信州佐久郡下海瀬村 | 新海亦兵衛 |
| 信州軽井沢 | 白き屋 何鳥 |
| 同 小諸市町 | 袋屋和兵衛 |
| 同 上田柳町 | 岡崎平助 如毛 |
| 同 海野町 | 斎藤勝右衛門 井々 |
| 同 原町 | 成沢七郎左衛門 雲帯 |
| 同 土橋 | 荒井亦七 三机 |
| 同 同 | 同平右衛門 争茂 |
| (同)下戸倉 | はつ音屋勝右衛門 虎杖 |
| 同 善光寺 | こまや吉九郎 猿左 |
| 同 柏原駅 | 中村与右衛門 平湖 |
| 同 | 中村六左衛門 新甫 |
| 同 | 妙専寺 |
| 同 野尻 | 石田津右衛門 湖光 |
| 信州毛野 | 滝沢善右衛門 可候 |
| 同 同 | 同八郎次 柯夕 |
| 同 佐久相木中島村 | 五日庵 一雨 |
| 同 中野 | 菊屋清左衛門 四海坊蘭長 |
| 同 牟礼駅 | 八田久順 |
| 信 野尻 | 石田津右衛門 湖光(重出) |
| 同 信光寺 | 露繻 |

▽八回め(父の遺産分割実行の交渉)

文化九年六月十二日出立。同月十八日帰郷。江戸帰着は八月十八日。

▽九回め(父の遺産分割実行の交渉)

文化九年十一月十七日(柏原帰住を決意して)出立。同月二十四日帰郷(是がまあ終の栖か雪五尺)。(文化十年一月二十六日、「熟談書付之事」成立。文化十一年四月十一日、結婚。八月二日、善光寺出立) 江戸帰着は八月九日。

最初の帰郷、すなわち『寛政三年紀行』の旅は、表向き(注1)の理由はともかく、荒奉公の中で「夷ぶりの俳諧」をおぼえ、素丸に拾われ(注2)て、とうとう一門の執筆役にとり立てられ、その上、二六庵(注2)の嗣号を許されていたとすれば、晴れて故郷に錦を飾る思いがあつて当然であろう。『寛政三年紀行』の冒頭には、「白き笠かぶるを生涯のはれとし、竹の杖つくを一期のはまれとして」とある。

二回めの帰郷中には、父・弥五兵衛の発病、そして逝去があつた。このときの体験は後に『父の終焉日記』の主要な素材となつた。また、弥五兵衛の遺産分割相続をめぐる抗争は、弥五兵衛発病の直後からはじまっている。

三回めの帰郷は、亡父の七回忌法会列席が第一の目的であつた。当然、その遺産分割についての交渉があつた。

四回めの帰郷は、遺産分割相続の交渉が目的であり、この度の交渉は難航した。

五回めの帰郷は、祖母・かなの三十三回忌法会列席が表面の理由

だが、七月九日の法会後も執拗に交渉を重ね、十一月二十四日に至つて、「取極一札之事」を成立させている。だが、十二月十七日江戸へもどつてみると、相生町の借家はすでに人手に渡つていた。

六回め、七回めの帰郷は、「取極一札之事」の実行をせまることが目的であつた。交渉はすまず、ことに七回めの帰郷では、柏原を通り越して野尻で一泊、翌朝柏原にもどり、墓参して、生家に入つている。『七番日記』文化七年五月十九日の条には、「十九日雨、辰刻柏原ニ入。小丸山墓参。村長(名主の嘉左衛門を指す)に逢ひ我家に入る。きのふ心の占のごとく素湯一つとも云ざれば、そこくにして出る。古郷やよるも障も茨の花」とある。

文化七年十二月二十三日、下総守谷の西林寺に入った一茶は、自身の社中を結ぶべく『我春集』に「発会序」を書き、守谷を中心に下総一帯の俳士の鳩合を図る。だが、この他郷における最後の野望も実を結ぶことはなかった。

文化九年一月二十三日、西林寺に入った一茶は、二月十一日まで滞在、この間に『株番』の序(前述)を書いている。

『株番』の序で、「我はもとの株番」と記し、守株の愚を自認・告白した一茶は、『七番日記』同年五月の条に、「いざいなん江戸は涼みもむつかしき」と、その真情を吐露している。

文化九年六月十二日江戸を立ち、善光寺の上原文路宅に一泊して、同月十八日柏原へ入った。宿所は本陣(中村観国)・小升屋。後日強力な社中となる人々を歴訪。もちろん、執拗に遺産の分配をせまつたはずである。

は、「黒土や草履のうらも梅の花」「春雨に大欠^{ウケ}ビスル美人哉」のよ
うな句を詠み、「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のとちんぶん
かんのうき世哉」と、それまでの作句姿勢を自嘲した。

観念的・通俗的な句風を排し、自身の詩に忠実に生きようとする
決意に誤りはない。当然、それを積極的に実践しようとする姿勢に
も誤りはなかった。だが、『我春集』に具体的に示された句風は、
相変わらずの俚俗的・田舎風とも評すべきものだった。その発想や
題材において、用語や季語の働かせ方において、それまでの一茶調
を出るものではなかった。したがって、中央俳壇においては言うに
及ばず、一茶の周辺においても従前に比すべき変化はなかった。

翌文化九年の『株番』の序では、「伊勢の暦」をめぐる逸話をあ
げ、「されば我がたま／＼練出せる発句といふものも、みずから
新しきとほこれば、人は古しとあざける。ふた／＼びよく／＼見れ
ば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほと／＼おのが心にうんじ果
て、三日ばかりも口を閉れば、是又、木偶人のごとくへんてつもな
く、よし／＼汝はなんぢをせよ。我はもとの株番。」と開き直る。
「お前さんたちは、お前さんたちの思うように、おれは、おれで自
分の道を行く。」そう言い切った一茶は、以後、北信における自身
の門派の形成に全力を傾ける。

二

一茶が安永六年（一五歳）江戸出府以降、文化十一年（五二歳）常田

久右衛門の女・きくと結婚して柏原に定住するようになるまで、確
かな帰郷の回数には次に示す九回である。

▽一回め（寛政三年紀行の旅）

寛政三年三月二十六日出立。（下総の馬泉・曇柳斎など葛飾派の俳人
を歴訪。四月十日、本郷から中仙道に入る）四月十八日帰郷。

▽二回め（帰郷中、父発病・逝去）

享和元年三月帰郷。（四月二十三日、父発病。五月二十一日、逝去）江戸
帰着は九月ごろ。

▽三回め（亡父七回忌法会）

文化四年七月帰郷。江戸帰着は十月四日。

▽四回め（父の遺産分割の交渉）

文化四年十月二十八日出立。十一月五日帰郷（雪の日や古郷人のぶ
あしらひ）。江戸帰着は同月十九日。

▽五回め（祖母三十三回忌法会）

文化五年五月二十五日出立。（草津を経て）七月二日帰郷。（七月九
日、祖母三十三回忌法会。十一月二十四日、父の遺産相続に関する「取極一
札之事」成立）江戸帰着は十二月十七日。

▽六回め（父の遺産分割実行の交渉）

文化六年三月二十日、春甫に同月二十二日出立予定を告げる。
（四月十日、亡母の里・二之倉）五月八日帰郷。江戸帰着は年末。

▽七回め（父の遺産分割実行の交渉）

文化七年五月十日出立。（五月十八日野尻）同月十九日帰郷（古郷や
よるも障るも茨の花）。江戸帰着は六月一日。

北信における一茶社中の形成

黄色 瑞 華

一

葛飾派の二六庵を嗣号した一茶は、寛政四年三月、西国長途の行脚に立った。この旅は、多く師・二六庵竹阿の縁をたより、京阪から淡路、四国を経て九州に及ぶというものであり、時間的には寛政十年秋帰東までの満六年を費した。

この旅では、高桑闌更・大伴大江丸・栗田樗堂などの著名な俳人たちと風交を結び、旅の記念集『旅拾遺』（寛政七）、『さらば笠』（寛政一〇）の上梓もあった。一茶は相当な自信を得て、江戸へもどつたと見てよからう。だが、それをそのまま受け入れてくれるほど、江戸の俳壇は甘くなかった。

『随斎筆記』を見ると、「寛政十二年二月廿七日」、「雉鳴て朝茶ぎらひ長閑也 成美」「二葉の菊ニ露のこぼるゝ 一茶」の付合があつて、このころから終生の後見人、夏目成美を知るようになったと思われる。また、享和末年ごろからの建部巢兆・鈴木道彦らとの風交も、その縁によるものであつたと思われる。

時代の「田舎趣味」に迎えられたこともあつたが、俳諧師一茶の生活は、それをささえるような確かな結社を結ぶこともできず、下総・上総を渡り歩く、田舎まわりの日々が続いた。その間、一茶は何度も自身の結社を持つべく働き、「月並俳諧」の興行も試みた。だが、その野望が実を結ぶことはなかった。

一茶の俳諧は、天明期の葛飾派の人々の句風に範を求めることから始まり、寛政期の京阪や四国・九州の著名俳人に学び、また、熱心に蕪村の句風を鑑としたこともあつた。だが、その努力にもかかわらず、彼の俳壇的位置に大きな変化はなかった。そうした中で、父の遺産問題は暗礁に乗りあがる。一茶はその因を継子としての自己の境遇に求め、その意識が創出する幻覚にも似た被害意識の中にはまっていくなか、「継子一茶」の誕生であつた。

文化八年の『我春集』、その序文には、そういう窮地に立たされた一茶が、起死回生の願いをこめて、下総守谷を拠点に一带の俳士たちの鳩合を図ろうとしたことがうかがえる。その序文で、観念的・通俗的俳諧を批判した一茶は、生活実感を重んじた新しい俳諧を主張し、みずからそれを積極的に実践しようとした。具体的に